



石井壬子夫のドローイング

2022.2.23 (Wed) - 3.6 (Sun)

■アクセス■

・東武伊勢崎線足利市駅徒歩 12分・JR 両毛線足利駅徒歩 8分

・北関東自動車道足利ICより 15分
(駐車場3台・近隣にも無料駐車場あり)

■11:00~18:00 (最終日は16:00まで)
月・火曜休廊 (月・火が祭日の場合は営業し、翌日休)

■軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

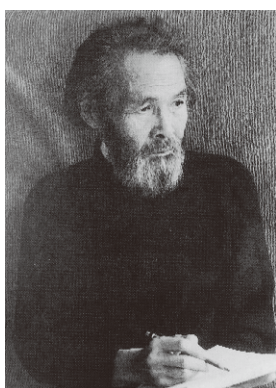
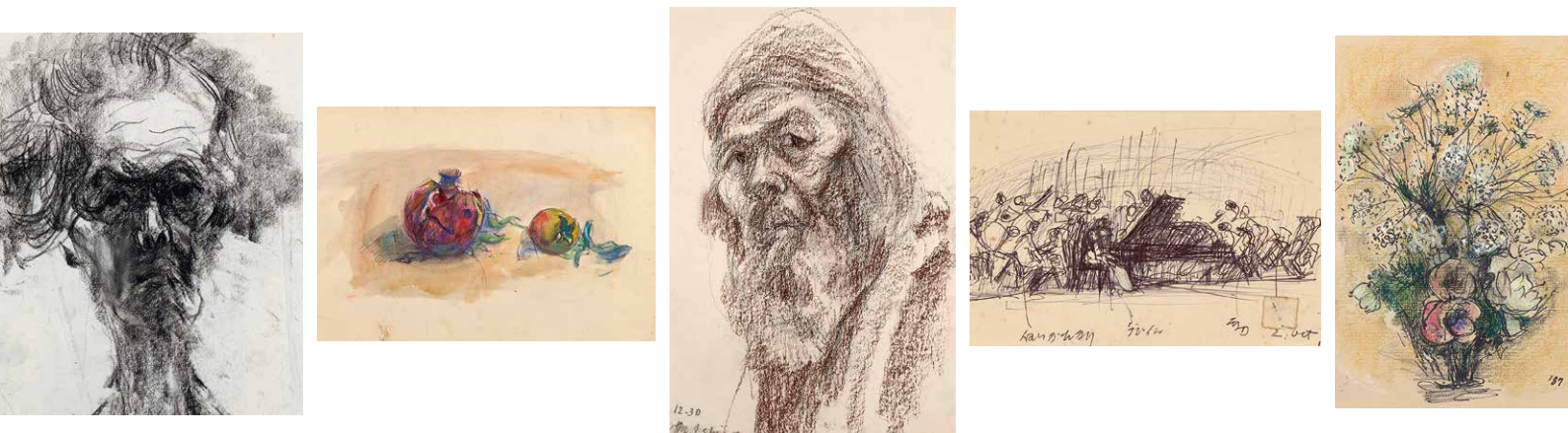
URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

石井壬子夫は晩年の 18 年間、毎日「自己像」を描き続けた。6,000 枚余りの作品群は、人に見せるために描いたものではない。日記のように自分自身に対して描いている。石井は「自己をみつめねば不安でいられない気持ち」になるという。「自己をみつめる」とは自身を客観視することである。距離のないところに客観はあり得ない。ではどうやって距離を生じさせるのか。彼にとってそれは描くことであつた。同時に不安を解消する手立てでもあつた。

この不安はいったい何処から来るのか。これは石井の戦争体験に源がある。彼は戦時中、教育者として教え子を戦地に見送った。直接、間接を問わず彼らを死へと導いた自責の念から逃れるわけにはいかない。石井の「不安」とは、そのことを忘却してしまうことにある。ここには、仕方なかったとは決して言うまいという思念がある。その延長線上に「ヒロシマ」連作がある。原爆で死んだ人々は仕方なく死んだのだろうか。決してそんなことはない。戦争により、人は加害者にも被害者にもなる。それは、仕方ないでは済まされない。

石井は、忘れないために自身に「痛み」を与える。それは、描くことであつた。「一日描かざれば、一日喰らわず」と自身に強く課した。自己像の峻烈な「視線」とその現れである清冽な「線」は、彼の「痛み」そのものなのである。

江尻 潔（足利市立美術館次長）



石井 壬子夫 Mineo Ishii

1912年 香川県高松市に生まれる。1932年 東京美術学校図画師範科入学。1935年 春陽会展に入選。茨城県立水戸中学校に教諭として勤務（～44）。1944年 群馬県立桐生高等女学校に転任。以降、葉鹿町立葉鹿中学校（足利）、栃木県立足利高等学校に転勤。1970年 教諭を退職、武蔵野美術学園研究科に入学。1971年 第7回主体美術展に入選。以降8～15、18回展に入選（～82）。1973年 この頃より毎日1枚自画像を描くようになる。（後に“自己像”と呼ぶ）1975年 シマ画廊（桐生市）、足利市民会館画廊にて個展。この頃から広島をテーマとしたシリーズに取り組む。1981年 足利市民会館画廊にて個展（油絵、デッサンなど33点）1990年 煥乎堂（前橋市）にて個展。石井壬子夫画集刊行。6月15日肺炎にて没、享年78歳。1992年 大川美術館にて“石井壬子夫展”開催。1993年 大川美術館にて“石井壬子夫『自己像』展”開催。2012年 大川美術館にて“作家特集展示 石井壬子夫～生誕100年を迎えて～”開催。2016年 広瀬川美術館にて“石井壬子夫・石井克一父と子の自画像展”開催。2019年 久叡館コレクション展、石井壬子夫展（石井画廊）。

■アクセス■

- ・東武伊勢崎線足利市駅徒歩12分・JR両毛線足利駅徒歩8分
- ・北関東自動車道足利ICより15分（駐車場3台・近隣にも無料駐車場あり）

- 11:00～18:00（最終日は16:00まで）
- 月・火曜休廊（月・火が祝日の場合は営業し、翌日休）
- 軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

